

退職記念最終講義

私が江口英一先生の「低所得不安定階層」研究から
学んだこと唐鎌 直義ⁱ

はじめに

老人福祉論最後の授業になりました。5年間がこんなに早いとは思ってもみませんでした。瞬く間の5年間でした。いま有賀先生から過分のお言葉をいただきましたが、果たしてそこまできちんとやれたかどうか、いまとなっては忸怩たる思いがあります。授業と学生への学修指導を誠実にきちんとやっていたと、そう思って立命館に赴任しました。その当たり前の思いが果たして全うできたかどうかわかりません。ともかくも今日という日を大過なく迎えられたというのが実情です。

「老人福祉論」第15講のレジュメと図表をお手元に配布してあります。恩師である江口英一先生が70歳の時に、私たち門下生が先生の古稀と中央大学定年退職をお祝いして本を出版しました。『日本社会調査の水脈』（法律文化社、1990年刊）という本です。これは江口先生の貧困調査研究を日本の貧困研究の歴史全体のなか位置づけてみようという趣旨で企画されました。この時、私が江口先生の研究の評価を執筆しましたので、その内容を今日はお話ししようと思います。

鈴木梅四郎『大阪名護町貧民窟探検記』（明治21年）、桜田文吾『貧天地饑寒窟探検記』（同23年）、松原岩五郎『最暗黒の東京』（同26年）といった貧困研究の書物が明治20年代初頭から日本で出版されるようになりました。激動の明治維新以降、ようやく社会が安定して、気がついてみたら周りに貧困者が大勢いたということだったのでしょう。当時、自然主義文学の影響を受けて（チェーホフやトルストイの影響により、二葉亭四迷の『浮雲』に代表される自然主義文学、つまり庶民の暮らしをありのままに描く文学、が流行り始めた）、この三人の先駆者が都市下層社会の実態をありのままに描くことを試みたわけです。明治32年には横山源之助の『日本の下層社会』（岩波文庫に収められている）が出版されます。この本は「戦前日本における貧困研究の金字塔」といわれるものです。その後、この風潮は政府の官僚にも及ぶようになり、内務省『細民調査』（明治44年）、大阪市『不良住宅地区調査』（大正14年）など、官公庁でも盛んに貧困研究が行われるようになり、最終的には地方都市にも波及していきました。日本の貧困研究は大正デモクラシーを背景として隆盛期を迎えます。この点が大事な点で、「デモクラシーのないところで社会調査はできない」と江口先生はよく言っていました。

これは脱線ですが、最初に赴任した大学で学長から「唐鎌さん、復旦大学との研究交流で中国に調査にいく

i 立命館大学産業社会学部教授、2017年4月より特別任用教授

ことになった。君は調査が専門だから参加してくれ」と頼まれました。私はその時、お断りしました。なぜかという「中国の人が日本人に本当に思っていることを話すはずがない」と思ったからです。「社会調査は民主主義が前提で、市民が本当に思っていることを話してくれないと調査として成り立ちません。中国には同行できません」と言いました。学長は不満だったようです。しかし案の定、中国に調査に行ったら、全員の先生方に官憲がずつついて回ったそうです。「唐鎌さんが言ったとおりだった。警察がついてきたら、誰も本当のことなんか言わないよ」「だから言ったとおりでしょう」と……。

社会調査は民主主義の進展が前提になっています。日本でも第二次世界大戦の準戦時期に入り言論統制が厳しくなると、社会調査（事実の探究）は一斉になくなります。事実を尊ぶことがなくなり、「偽りのリアリティ」が喧伝されるようになるのです。戦後になって学問の自由を謳った新憲法のもとで、爆発的に社会調査が行われるようになります。民主主義の進展こそが学問にとって望ましい環境なのです。要は、研究者が社会情勢を気にしながら、遠慮しながら発言していたのでは、学問は委縮してしまうということです。それを避けるために、日本国憲法第23条に「学問の自由はこれを保障する」と簡単明瞭に記されているのです。研究者が世情や社会動向を気にして身分的保身に走り、事実を追究しなくなったら、学問はお終いですね。

そういう日本における社会調査の歴史の中に、江口先生はご自身の研究を位置づけてみたかったのでしょうか。この本を企画した時、江口先生から「私の調査研究のパートは大須君と唐鎌君に任せるから」といわれて、まだ37歳で就職したばかりで、江口ゼミの中では一番年下の私がどうしようかと思いました。「唐鎌君、やってみてください」といわれて引き受けたのです。その日から、先生が書いた論文を全部読み始めました。膨大な量です。そして「社会階層に基づく社会的事実の発見—江口社会調査における階層と階級—」という論文にまとめました。今になって「こんな内容でよかったのかな」と思い返していますが、先生は私が書いた内容について、いいとも悪いとも一切言いませんでした。どこか別の雑誌等に行った論文の場合には、いろいろと指摘して下さるのですけれども、古稀記念論文集に書いた時は何もおっしゃらなかった。ある時、先輩に当たる上智大学の松崎象太郎先生から「江口先生が『よく書けている』と言ってたぞ」とお聞きしました。先生の研究をかなり大胆に評価したのですが、先生は納得して下さったのだと嬉しかったです。その内容を65歳になった今、みなさんにお話することになった次第です。僕の江口先生に対するオマージュの論文なので、聞いていただければ幸いです。この内容を自分の研究の指針にして、今日まで日本の高齢者の貧困研究をやってきました。少し恥ずかしい話ですが、先生の論文を泣きながら読んだことを思い出します。「この人は、ここまで低所得者に寄り添えるのか」と感動しながら……。

江口先生の大学院の授業に出るようになったのが1974年で、その時『現代の低所得層—貧困研究の方法—』という三巻本を先生に書いてもらうための準備委員会が立ち上がっていました。先生の授業の単位をとっているのは僕と佛教大学の金澤誠一先輩の二人しかいませんで、あと20人くらい先輩方が出席していて、驚きました。こうして江口先生を囲む研究会が始まりました。私が授業に出たらすぐに先生から、「唐鎌君、来週、宮本憲一さんの『社会資本論』について報告してください。『現代的貧困』という概念がよくわからないので」といわれました。今日は、この三巻本の内容を踏まえながら、お話していこうと思います。

1. 戦後日本における「貧困の発見」

今の日本社会では「法の下での平等」が保障されています。誰でも法的には平等です。ただし現実には、社会的地位や経済的状況によって格差があります。実際には不平等なわけです。「法の下での平等」というのは法的

には平等が保障されているということであり、現実には不平等が存在するから、敢えて「法の下での平等」が主張されなければならない、という意味だと思います。先生は「調査の対象を階層的に把握することが大事で、経済力、社会的地位に注目しながら、社会全体を階層的に見るべきだ」と主張されています。つまり現実にある格差を重視する立場です。行政や社会福祉協議会がよくやるアンケート調査では、所得水準も家族状況も職業も聞かずに、意識だけを聴く調査が行われます。統計上は一人の人が一つの意見を述べたということになり、あくまで「1」として処理されます。問1について回答選択肢が10あり、その中の3番を選んだ人が何人いるか。それが調査結果となります。先生は「それではだめだ」と言うのです。「どういう人が、どの回答項目を選んだかが大事だ。調査をする場合には常に階層的に把握できる仕掛けをつくって調査しなければいけない」と。高齢者も同じです。日本にはとても裕福な高齢者もいれば、ホームレスの高齢者もいます。裕福な高齢者とホームレスの高齢者の意識と意見は違って当たり前です。社会階層として対象を把握していかないといけないという当然のことが忘れられているのが現実です。

「社会階層」アプローチが江口先生の研究の一番のポイントです。その中でも「低所得不安定階層」の問題を、とりわけ先生は大事にされました。一番所得の低い勤労者に着目したのです。これはホームレスのことではありません。日雇労働者と名目的自営業者、つまり不安定な雇用の下で家族を養いながら普通に働いている人のことです。近年、貧困というとホームレスのことだとミスリードする研究者が少なくないので、断っておきます。

(1) 日本における社会階層の発見

1950年に厚生省が富山市の全世帯を対象に生活調査を実施しました。このデータを東大社研が借り受け、氏原正治郎先生の主査のもとで江口先生、高梨昌先生などがこの調査の分析を行いました。元は厚生省のデータです。10分の1抽出で2754世帯分のデータが集まりました。これを素材として社会階層の発見が試みられます。氏原先生、江口先生の合作だと思います。

社会階層とは単に所得の多寡、生活水準の上下の側面から把握された概念（所得階層）ではありません。また職業階層でもありません。もっと複雑な概念です。ポイントは「現実社会の中で一定の社会関係（ソーシャル・リレーションズ）をとり結びながら、自己を日々再生産している人々の個々の経済的地位に重点をおくことによって把握された概念」だということです。大事な点は「人間は社会関係を結びながら生きている」という点です。大企業の資本家の下には大企業労働者がいます。中小企業の資本家の下には中小企業労働者がいます。零細企業の社長の下には零細企業労働者がいます。このように、目に見えないいくつもの関係が張り巡らされた中で、賃労働という雇用関係の中で、人々の労働と生活ができあがっている。総資本と総労働が直に対峙しているわけではないのです。自営業者や農民も同様で、「常に社会関係の中で自己を再生産している姿を見なければいけない」と先生は言っています。

最初に、社会階層の構成要素（6つ）を掲げています。一番目が「社会階級による差異」です。普通、資本主義は「二大階級」ですが、江口先生の場合は「三大階級」といまして、資本家・労働者のほかに自営業者を上げています。国民はまずこの3つに区分されるということです。2番目は「産業による差異」です。製造業か商業なのかによって労働者の気質が異なると言っています。3番目は「雇用上の地位の差異」です。役付きかヒラ社員かという区別です。4番目は「労働の性質と格による差異」です。労働には肉体労働と精神労働の違いがあります。また格（グレード）もある。グレードは大事で、自分の職業上のグレードを守ることが重要だと言っています。サッチャー以前のイギリスでは職業紹介の面でこれを重視していました。失業

表1 富山市における「社会階級・階層構成」とその構造（比率）1952年

社会階層	社会階層	男子世帯	女子世帯			
I 資本家階級 (5.5)	(5.5)	工業経営者	30(1.5)			
		中小工業主	41(2.0)			
		商業経営者	39(1.9)			
II 自営業主層 (31.7)	小商業主 (16.6)	一般物品販売小売店主	110(5.5)			
		食料品販売小売店主	70(3.5)			
		米・酒・呉服類販売小売店主	24(1.2)	自営業主 41(16.3)		
		飲食店店主	15(0.8)			
		行商・露天商	25(1.2)			
		売薬行商	90(4.5)			
		職人 (12.6)	建設業関係職人	95(4.7)		
			建設業関係以外の職人	158(7.9)		
		III 労働者階級 (62.9)	職人 (2.5)	自由業	50(2.5)	
				役付俸給被用者	50(2.5)	女子事務員 28(11.1)
一般俸給被用者	240(11.9)			女子技能者 15(6.0)		
俸給生活者 (27.8)	公務員			138(6.9)		
	技術者			78(3.9)		
	教師			54(2.7)		
生産労働者 (29.4)	労働者(上)			336(16.7)	女子労働者 22(8.7)	
	鉄道関係従業者			41(2.0)		
	通信業従業者			19(0.9)		
	道路運輸従業者			58(2.9)		
	労働者(下)	65(3.2)	内職及び家内労働者 37(14.7)			
使用人 (3.1)	(2.6)	単純労働者	71(3.5)	単純労働者 27(10.7)		
		商業使用人	58(2.9)	商業使用人 15(6.0)		
		飲食店使用人	4(0.2)	家事使用人 8(3.2)		
		無職及び無業者	53(2.6)	その他 4(1.6) 無職及び無業者 55(21.7)		
(100.0)	(100.0)	計	2,012(100.0)	252(100.0)		

(注) 下記の文献では資本家階級が「使用者階級」に、労働者階級が「被用者階級」にそれぞれなっていたが、後に江口氏によって表のごとく訂正されているので訂正されたものを掲げた。

(出所) 氏原・江口「都市における貧困層の分布と形成に関する一資料(-)」『社会科学研究』第8巻第1号、1956年、83～84ページ。

して職業紹介所（ジョブセンター）にいて次の仕事を探す場合、雇用指導官（窓口の人）から自分のこれまでの職業経歴に比べて低い地位の職業を紹介された場合、その人はジョブセンターの斡旋を断ることができました。断っても失業手当を停止してはならないと定められていました。日本でいう職業安定法と同じですが、日本と違って「適職条項」というものがあり、就職斡旋に当たってその人の経歴を大事にしていました。そうでないと、転職のたびにどんどん地位＝グレードが下がっていく。イギリスでは職業のグレードを尊重して、今まで働いてきた仕事よりグレードが上の仕事を紹介しなければいけないことになっていました。日本では職安に行って求職活動をすれば、どんどんと地位が下がっていくのが一般的です。精神労働か肉体労働か、あるいは単純労働か複雑労働かによって、労働者の意識が変わってくると言っています。5番目は「社

表2 富山市における社会階層の序列（ランク）
（男子） （女子）

	（男子）	（女子）
最 下 位	下位より	下位より
	1. 単純労働者	1. 単純労働者
下 位	2. 行商・露店商	2. 内職及び家内労働
	3. 飲食店使用人	3. 家事使用人
下 位	4. 労働者(下)	4. 女子労働者
	5. 商業使用人	5. 小商業使用人
下 位	6. 建設業関係以外の職人	6. 小商業主
	7. 建設業関係職人	7. 女子事務員
下 位	8. 労働者(上)	8. 女子技能者
	9. 売薬行商	「その他」及び「無職」は除外した。
中 位	10. 通信業従業者	
	11. 鉄道関係従業者	
中 位	12. 道路運輸従業者	
	13. 公務員	
中 位	14. 一般俸給被用者	
	15. 技術者	
中 位	16. 食料品販売小売店主	
	17. 教師	
中 位	18. 一般物品販売小売店主	
	19. 米・酒・呉服類等小売店主	
上 位	20. 飲食店主	
	21. 小工業主	
上 位	22. 自由業	
	23. 役付俸給被用者	
上 位	24. 商業経営者	
	25. 工業経営者	

（注）無職は除外した。又、内職家内労働は該当者がいないため除外した。

（出所）表1に同じ、100ページおよび124ページ。

会的地位と雇用形態上の差異」です。これは大工さんのような職人層の生活様式と職業意識を別に扱うために、このような構成要素を作っています。6番目に「雇用の規則性とそれに基づく所得の規則性」、つまり反対側から見れば「雇用の不安定性とそれに基づく所得の不安定性」。これが大事だと言っています。この6つの構成要素に基づいて階層分類を行っていきました。

前頁の表1「富山市における社会階層・階級の構成比」をご覧ください。男子の場合、全部で25階層に分かれています。地方都市の富山市の対象世帯を、このような社会関係にあるものとして把握しています。経営者は3つに分かれていて、工業経営者、中小工業経営者、商業経営者です。労働者は生産労働者(上)から始まり、単純労働者にまで分類されています。それぞれ社会関係が対応したものとして捉えられています。女性の職種は表2に示してあります。当時は女性の職種が少なかったので、階層自体が少なく、総じて低位にあります。

これらは経済的地位を異にする、ばらばらの集団ではなく、相互に社会関係として結びつけられています。一つの企業、一つの職場、一つの団体として。資本家と労働者、大資本と中小資本、労働者内の競争関係。そういうものに配慮してつくられた概念だということです。社会における「利害の対立関係」または「支配・従

属関係」に着目したものです。マルクス経済学の場合は「資本家の支配のもとで、労働者は搾取されている」といいますが、これについて江口先生は疑問に思っていたそうです。なぜならば、労働省に勤めていた時に、そういう単純な力関係では把握できない現象をよく見たのだそうです。専修大学経済学部の教授を務めながら労働省からも給料をもらっていたという希有な先生なのですが、大企業の若いヒラ社員から中小企業の社長が叱られている現場を目撃したのだそうです。そういう光景をよく目の当たりにしたと。普通は力関係からして、資本家に労働者が叱られるのが当たり前です。したがって、単純に資本が支配して労働者が従属しているとはいえない。大企業の労働者と中小企業の社長を比べたら、「大企業の労働者の方が中小企業の経営者より経済的力をもっている」と言っていました。だから社会関係の把握は簡単ではない。そのように現実を見なければいけないと言っていました。このように支配・従属関係を理論的に単純にとらえず、細かくとらえていくべきだという主張です。

(2) 貧困階層の発見

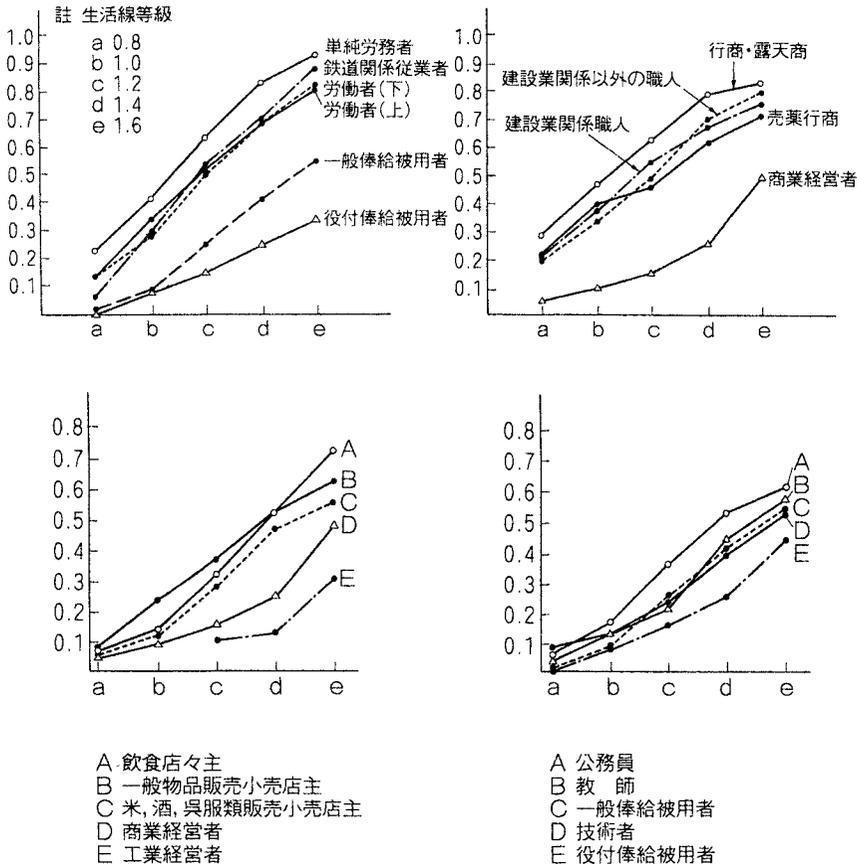
前頁の表2「富山市における社会階層の序列」をご覧ください。男子の場合、単純労働者から工場経営者まで、25の階層を下から上に並べ替えています。並べ替えるためには、Aという階層よりBという階層の方が上であるという証明が必要になります。この証明ということに関して、私は江口先生の研究に圧倒されました。「ここまでやるの?!」と……。

25歳くらいの時、ある短い理論的な論文を書きました。先生には見せなかったのですが、先生はこっそり読んでいたようです。ある時、お茶の水駅前の檸檬という画材屋に呼び出されまして、そこで落ち合った後、ミロという喫茶店につれていかれ、「唐鎌君、あなたが書いた論文のことだけれど、あれは確かにいっていることは正しいし、論点はいいと思う。しかし、データがない。データがない論文は絶対に書いてはいけない。どんなにいいことをいってもデータがなければ研究として無価値だ。あなたがもしあの論文に対してきちんとデータをつけていけば、どれほど論文の価値が上がったかもしれない。これから書く論文にはすべて必ずデータをつけなさい」とお説教されました。でも真剣にそう言うてくださる先生の言葉がうれしかったですね。それ以来、証明ということを守ってきました。今では若気の至りだったと思っています。必ずデータで書くことにしています。調査して得た事実、統計から導いた事実による証明を研究の命にするということですね。

私にこう言った先生のことから、階層の序列づけを徹頭徹尾、労働省の官庁統計で実証しているのです。最初は、富山市民の生活調査から、2754世帯の生活水準の分散度の高さを階層別に見ています。上の社会階層ほど生活水準の差（上下の差）が激しく、低位の社会階層ほど生活水準の上下の差が小さくなっていることを発見している。この分散度の高低によって、25の階層を分けています。上位の階層ほど上下の幅が大きい（分散度が高い）。一番高い工場経営者では意外なことに貧富の差、所得格差が大きい。下位の階層はみな、おしなべて所得格差が小さい。その階層全体が貧困であるということです。分散度の高さは、その階層に所属できる耐性の強弱をも意味しています。中下位の階層の低い分散度は、何か問題が生じた場合に、その階層に留まれる時間の短さをも示しているのです。

次に、図1の「生活線等級の累積度数分布」をご覧ください。階層別に描かれた累積度数分布の線を見ると、階層間で交錯していない。線が交わらない。すべて一定の幅を保ったまま上に上がっています。ここから、各階層が切り分けられることを証明しているわけです。「ここまでやるの!」と呆れてしまうのですが、先生はともかく「実証」一筋です。

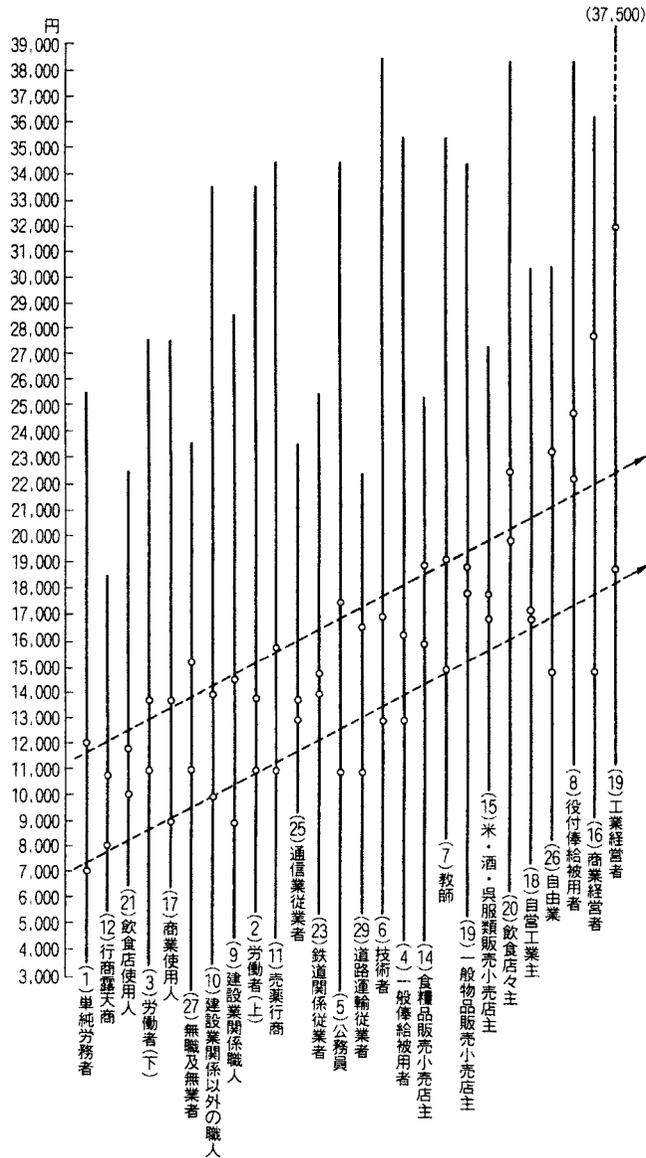
図1 生活線等級別世帯の累積度数分布図



(出所) 表1に同じ, 94~95ページ。

図2は、25の階層の総所得の分布状況の実際を示したものです。それを下位から上位へ並べた後、下位の貧困階層に着目しています。富山市調査におけるこのデータを図示したものが、先生の有名な「社会階層のシェーマ」の図です。次々頁の図3と図4がそれに該当しますが、とりわけ図4が大事で、これが先生の研究の出発点でもあり終着点でもある図です。先生からはよく「論文一本について、自分の研究のすべてを表す図を1点描きなさい」といわれました。社会階層がa, b, c, d, eと分かれています。生活水準の一番高いaクラスは、細長い菱形で上下の幅が大きい。bに移ると、菱形が横に広がっていき、上下の高さが小さくなる。c, d, eと下に移るにつれて、どんどん菱形がひしゃげていきます。eの階層が一番下位に置かれる。これが先生の社会階層のシェーマです。図4ではシェーマ化した図に生活保護の規準をあてはめています。各々の菱形の上に、下に向かう矢印がついていますが、これが「支配」とか「抑圧」です。「社会保障をカットする、労働時間を長くする、税金を増やす、消費税率を上げる」、そういう抑圧が不断にかかっている。それがaの階層に働くとaの階層が上下に分解するわけです。a階層の工場経営者も安泰ではない。分解して、やがてb階層に落ちる。b階層が抑圧を受けると分解してc階層に移る。c階層は貧困線以下に落ちている部分があります。最後は単純労働者、日雇い労働者という、階層全体が生活保護以下基準のe階層に落ちる。こ

図2 各社会階層の総支出による配列

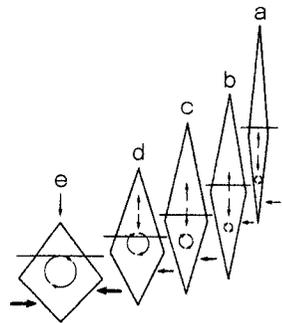


(出所) 表1に同じ、100ページ。

の一連の過程を「階層転落」と呼び、そういう流れの中で当時の日本人が生活を送っていたということです。これが先生の有名な図です。

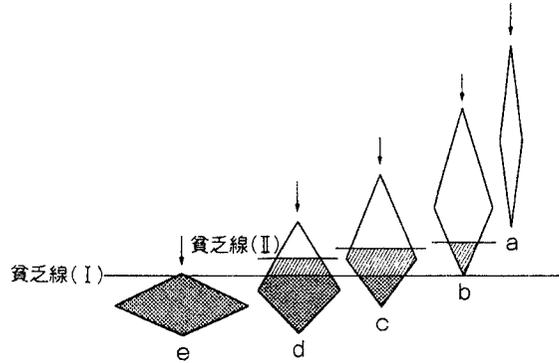
これについて『日本貧困史』を書いた吉田久一先生から批判がありました。「『転落』という言葉には価値判断の響きがある。転落というとその人が悪いことをしたように見える。使わない方がいい」と言われました。江口先生はそれ以降、「階層移動」といっています。社会全体がゆっくり下降移動している。ここまで言えばわかりますよね。こういう力が働いていることは、「貧困線以下にある階層が増えるか減るか。現状を維持し

図3 社会階層分布型及び分化・分解・自己再生産



注 (1) a = 上層の社会階層
 b c = 中層の社会階層
 d e = 下層の社会階層
 (2) 矢印は、階層内の上下向は分化と停帯、自己再生産を示し、階層外の横方向は半分解(流動)を示す
 (3) 横線は平均的生活水準を示す
 (出所) 表1に同じ、105ページ。

図4 社会階層の位置



注 (1) a = 上層の社会階層
 b, c = 中層の社会階層
 d, e = 下層の社会階層
 (2) e は貧困層のモデルとしての社会階層。貧困層と社会階層はこの場合一致している。
 (3) 矢印は各社会階層に働く社会的、経済的圧力の方向を示す。
 (4) 横線は貧乏線。
 (5) 貧乏線(I)はラウンターの第一次貧乏線に当り貧乏線(II)は第二次貧乏線に当ると云いえる。即ち黒い部分は困窮Destitutionの状態にあると云ってよい。

(出所) 表1に同じ、133ページ。

ているか。これを測定すれば日本社会のその時々々の支配の強さがわかる」と言うのです。江口先生はこれを証明した後、e階層の「量」の測定と「労働と生活の質的变化」を分析するようになります。e階層が増えたか減ったか、どう変わったかを、晩年まで分析していました。社会の抑圧と支配の存在を、高度経済成長に浮かれる日本で証明し続けた稀有の人です。貧困研究と言いながら、その骨格は雄大でしょう？

(3) 貧困階層の量的把握

『国勢調査』の結果が5年ごとに発表されます。先生は、その職業細分類と『事業所統計』から貧困階層を把握する独特の方法を編み出します。階級構成表は京都大学の大橋隆憲先生の研究が有名でしたが、江口先生の貧困階層の量を把握するための階層構成表も、なかなかすごいものです。淑徳大学の川上昌子先生が2000年国調までずっと継続してやっておられました。低所得不安定階層の量が増えたかどうかで、日本における国民に対する抑圧が強まったか弱まったか、測定しています。高度経済成長の時代には、それが36%から29%にまで下がりました。2000年の国勢調査ではやや増えてきていて、「失われた10年」の意味をわれわれに伝えていきます。

本当は私が2005年、2010年、2015年国調の分析をやらないといけないのですが、もう体力的に無理かなと思うこの頃です。川上先生から膨大な分析マニュアルがダンボール2つ分届いているのです。「私はもうできなくなったから、唐鎌さん、やってね」という意味なのでしょう。まだ30代のときに、江口先生から「国調データで東京都の階層構成表をつくってください」と頼まれて、一夏休み中、毎日数字と格闘していたことがあります。10時間労働を50日くらい。大きな表が一つできまして、丸めて持っていったら、先生から「ああ忘れていた。ご苦労さまでした」と。その時に体を壊しました。毎日、机に向かって胃の部分を押さえていたので、

胃が悪くなりまして、激痩せで51キロに。この作業はとても一人ではできないと思いました。川上先生は日本福祉大学の犬野勇夫先生と二人でコンピュータを使ってやっていたそうです。エクセルデータ化するまでの手順がものすごく大変です。もう少し早く立命館に来ていれば、スタッフを養成していっしょにやれたと思いますが……。今は「低所得不安定階層」の人たちは、非正規労働者の増大によってかなり増えていると思います。日本国民に対する全体的な抑圧が強まっている証明です。だから先生はこの研究を続けたのです。

「社会科学分野の研究者は貧困の研究だけをしていればいい」と、先生はそこまで言うのですよ。「社会調査は貧困調査以外にありえませんね」と僕には豪語していましたが、外では絶対に言いません。そのくらい先生はご自分の「貧困研究」に自信と自負を持っていた。「一般のマルクス経済学者のように、抑圧のメカニズムを企業内部の労使対抗として平面的にとらえるのではなく、社会構造全体を通じて析出される貧困の問題として把握すべきだ」と。そういう研究を先生はされていたのです。

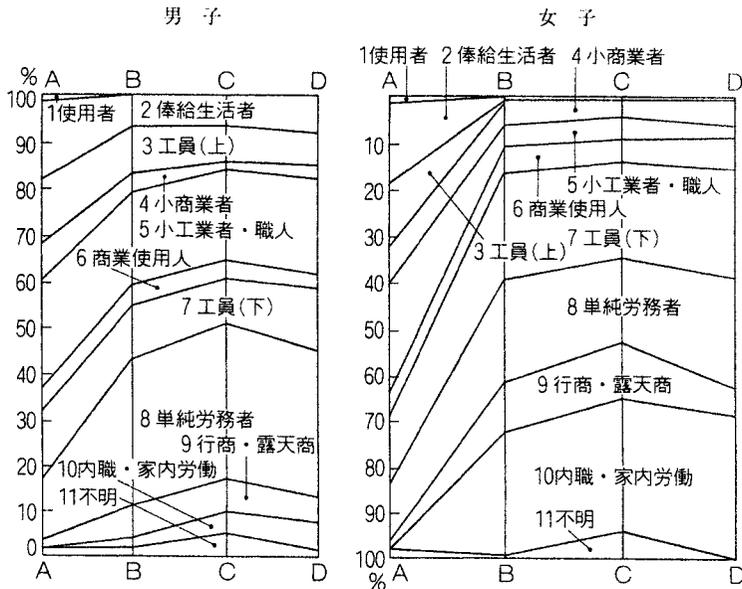
(4) 貧困階層＝「ワーキング・プア」

では「低所得不安定階層」とは具体的にはどういう人々を指すのか。第一には、「消費生活水準の低位性」です。生理的限界以下の生活をしている。または、ピーター・タウンゼント流の「標準生活を保てない状態」を「貧困」と考えています。そして何よりも、現に働いている人々であること。つまり「働く貧困者＝ワーキング・プア」であること。「ワーキング・プア」という言葉は先生が1960年くらいに使った言葉です。最近、後藤道夫先生が2000年代に入って「ワーキング・プアという概念を言うようになったのは自分だ」とおっしゃっていますが、江口先生の論文を読めばすでに60年代に書かれています。ワーキング・プアという概念を日本で最初に使ったのは江口先生です。この言葉には語源があり、19世紀終わりにロンドンで貧困調査をした、チャールズ・ブースの“Life and Labour of the People in London”（1887～1903年）という有名な「ロンドン調査」がありますが、その中でブースが「レイバリング・プア」(Labouring Poor) という言葉を使っています。「働く貧困者」のことを江口先生は「ワーキング・プア」と呼んだのです。マルクスの概念で言うならば、相対的過剰人口の中の停滞的過剰人口を中心とした概念です。

「低所得不安定階層」は就業人口の中の約30%を占める最下位の階層からなっている。具体的には「日雇労働者」と「名目的自営業者」がその代表です。先生は最下のe階層を見つけた後、「日雇労働者研究」「名目的自営業者研究」という実態調査に邁進されました。こればかりずっとやっていたのですね。北海道大学の時も、日本女子大学の時も。中央大学の時には、すでに日雇労働者研究は終わっていて、まとめの段階に入っていた時に僕が修士課程に進学したということです。これは「生活保護直前階層」ということです。生活保護を受けるに至った人が、その直前にいた階層。これが「低所得不安定階層」ということです。被保護世帯の析出母体です。先生はこの点も実証してしまっていて、生活保護に転落してくる時に必ず経由する階層だと。富山調査と同じく、厚生省がやった静岡市の被保護者調査があり、東大社研がデータをもらい受けて分析しました。

図5の静岡調査のデータをご覧ください。平常だった時から生活保護に至るまで、対象者に職歴の変化を聞き、その移動状況を見たものです。Aが以前の職業。Bが貧困に陥る原因が発生した時の職業。Cが生活保護を受けた時点の職業。Dが現在の職業。この変化を追っています。Cに近づくにつれて、単純労働者が非常に増えていく。ここを「生活保護を受けるに至った人が、その直前まで働いていた職業」と位置づけたわけです。女子世帯主についても同じです。内職、家内労働、行商、露天商といった単純労働者が増えていくことを証明しています。

図5 時点別に見た職業構成の変化



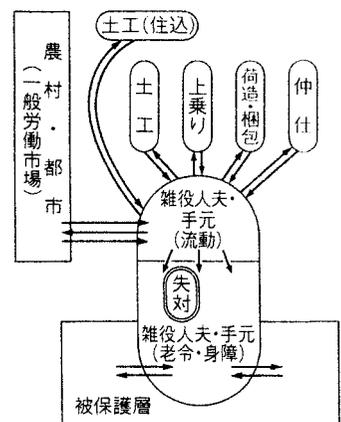
(出所) 氏原・江口・高梨・関谷「都市における貧困層の分布と形成に関する一資料」『社会科学研究』第11巻第2号, 1959年, 103, 104ページ。

またこれらの単純労働市場は、誰もが就労しうる「開放的労働市場」をつくっています。一番低位の職業には誰でも入って来ることができる。だから「開放的労働市場」と呼ぶべきであると。本来、すべて職業には縄張り (demarcation) があり、一定の経験、一定の資格、一定の学歴がないと入れない職業がほとんどです。しかし、日雇労働は、時には体力さえ問われることなく、誰でも入ることができる。「縄張りのなさが貧困を体現する職業階層の特徴である」と書かれています。

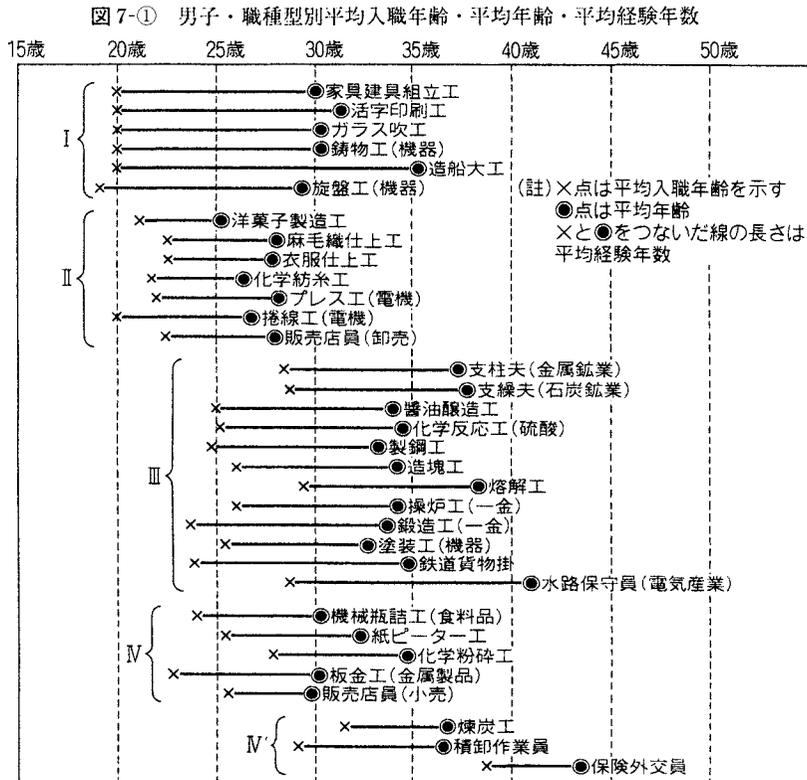
図6の「開放的労働市場の模型」をご覧ください。一番下に被保護層、生活保護受給者がいて、雑役人夫、手元、老人、身体障害者等々と混ざり合いながら存在しています。その上に、国の失業対策事業従事者がいて、一線を画して雑役人夫、手元がいる。その底辺労働市場には土工、上乗り、荷造り、梱包、仲仕から労働者が入り込んでくる。農村部からも都市からも、一般労働市場から入ってくる。誰でも、住所も氏名も問われずに就くことができる仕事が「開放的労働市場」として存在している。具体的には大阪の西成・釜ヶ崎地区、東京都台東区の日暮が丘地区、横浜市中区の寿町を思い浮かべてください。江口先生はどこまでも実証しないと気が済まない人なのです。

「開放的労働市場」はまた、中高年になって流入してくる職業でもあります。熟練を必要としない職業です。あらゆる産業にまたがって存在している職業から成っています。先生はこれも証明しています。ケーキ菓子職人は何歳でその職業について、その後何年間働くかを国の統計から分析している。「新卒で入り、長期に就く職業」と「中高年

図6 「開放的労働市場」の模型



(出所) 江口英一『現代の低所得層』中巻, 未来社, 1980年, 131ページ。



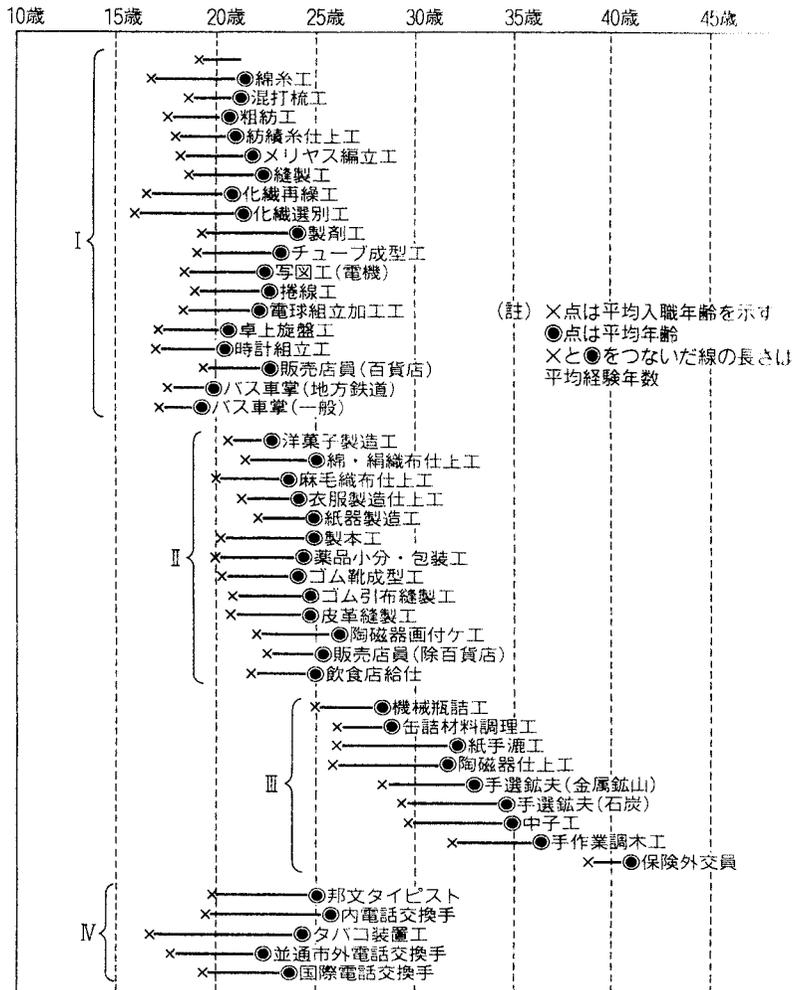
(出所) 江口英一「職種と年齢および継続期間」『専修大学論集』第16号, 1958年1月, 74ページ。

表8 「不安定層」の構成

階 層	内 容	例 示
賃労働者階級		
工業労働者	10~29人規模製造業被用者	玩具製造工, 木製品製造工 その他
単純労働者	軽作業, 及び軽作業以外, 9人以下規模の商業, サービス, 飲食業被用者	守衛, 左官, 手伝, 土工, 廃品選別人, 集金人, セールスマン, 店員その他
資本制家内労働者	5人以下の製造業主, 被用者	ヘップ加工工, クツ底付工 折箱製造工その他
自営業者・使用人・その他		
建設平職人	他人をやとわない平職人, 1人親方	大工, 左官, とび職など
建設以外の職人	9人以下の手工業者	家具製造業, 木彫師その他
浮動的自営業者		行商, 小商人, 仲買人, 貸仕事
使用人	商業, サービス, 飲食業使用人, 家事使用人その他	店員, 女中, バタヤその他
無業		病人, 金利生活者, その他

(出所) 江口英一「不安定層の集約点」『都市問題』第55巻第4号, 1964年4月号, 47ページ。

図7-② 女子・職種別平均入職年齢・平均年齢・平均経年数



(出所) 図7-①と同じ、80ページ。

になって入り、短期間しか続かない職業」に分けて分析しています。日雇労働は中高年になってから流入してくる職業ということです。また、あらゆる産業にまたがって分布している職業でもあります。日本では当時、全体で134部門の産業部門があり、人夫、雑役はその中の95部門に渡って分布していました。「熟練度の低い仕事ほど多くの分野にまたがって分布している」ことを証明しています。呆れてしまうくらいの熱心さです。

(5) 「低所得不安定階層」の構成

さまざまな官庁統計の分析や実態調査を通じて証明した後、低所得不安定階層の構成を出します。前頁の表8をご覧ください。賃金労働者階級には「工業労働者」の中の「10～29人規模製造業被用者」「玩具製造工、木製品製造工、その他」が挙げられています。それから「単純労働者、軽作業従事者」。「9人以下規模の商業、飲食業、サービス業の被用者」。「守衛、左官、手伝い、廃品選別人、集金人、セールスマン、店員」。資本制家内労働者として「5人以下の製造業種被用者」。例としてハッピーサンダルの加工工、靴底づけ工、折り箱製

造工。「自営業者、使用人、その他」として建設ヒラ職人、大工、左官、鳶職。「建設職人」の場合は一人親方。「建設以外の職人」は9人以下の工業者として家具製造業者、木彫師、その他。「行商、小商人」、「仲買人」、「賃仕事の人」。「使用人」は商業、サービス・飲食業の使用人、家事使用人、その他です。店員、女中、パタヤ、その他。「無業」が病人、金利生活者、その他となっています。金利生活者といっても零細な金利だと思っています。これが先生が最終的に抽出した当時のワーキング・プアです。

(6) 山谷調査と興野町調査

これ以降は「山谷日雇労働者調査」に向かっていきます。佛教大学の副学長をされていた浜岡政好先生が山谷調査の頃に江口先生のところにおいて、東京の山谷地区において、先生のお供でドヤに泊まり、朝5時に起きて日雇労働者が手配師につれていかれる状況を見たりしながら、賃金や現場での労働について調査したそうです。仕事から帰ってくると、日雇労働者たちは1日の疲れを休めるために飲んだり、食べたりする。日雇労働者がいく飲み屋にいっしょにいて、先生もお酒を飲みながら話を聞いていた。先の三巻本の中巻に山谷調査のことが載っています。当時、日雇労働者は賃金が割と高かった。1万円近い日当をもらっていました。先生は、1万円日当をもらって日雇労働者が真っ当に生活できるかどうかを究明しました。帰ってきてイカ刺を食べながらカストリ焼酎を飲む。夕飯にいくら使うかを調べる。ニッカボッカのズボンは結構破れる。それを売っている商店が山谷のイロハ通りにあります。ニッカボッカがいくらで、何日もつか。ひと月に何本ズボンを駄目にするか。地下足袋も同様です。こういうことを調べて、消費生活にいくらかかるかを計算する。それから、ドヤ代が一日いくらかを計算する。

その一方で、収入に関して1年間に月平均何日働けるかを計算する。屋外労働は雨の日には働けません。アブレとって働けない。1年間の平均で月に17日しか働けないことが判りました。17日×1万円=月収17万円で、ドヤ代、仕事着代、食生活を賄わなければならない。計算すると消費生活は優に17万円を超えてしまうのです。たった一人、男一人の生活で、自分自身でさえ再生産できない程度の賃金をもらっていることを証明しました。これを「最低限以下生活の構造」として三巻本の中巻に書かれています。事実の重みに圧倒されます。あまりに丹念に見ているので。当時、先生は毎年、12月31日からお正月三が日まで山谷のドヤに泊まっていました。「唐鎌君もどう？」といわれたことは一度もありません。山谷の飲み屋には先生とよく行きましたが……。平気で食べて飲みましたけれど。先生の言によれば、「西岡幸泰君（専修大学教授）は、ここのお酒が飲めないだよ。加藤佑治君（専修大学教授）は飲んでいただけね。西岡君は奥さんが看護婦さんだから、止められていたんだろう」とのことでした。

その前に日本女子大学時代に実施した調査が「名目的自営業者」の発見です。この概念も先生が作ったものです。東京都足立区西新井興野町の靴職人さんの生活を活写した研究です。当時、スタンダード靴店が出てきて、靴の製造が工場製品に変わっていく時代でした。工場から一般の靴職人に製造過程の一部分が下請けされる。それまでは自営業者として甲の部分から底まで、フルに靴をつくってきた。そうした職人が機械化によって一工程の自営業者に落とされる。スタンダード靴店に勤めている労働者の賃金と自営業でやっている靴職人の工賃がどれくらい違うかを調査している。腕を売るはずの職人が時間を売る労働者よりも低い賃率で働いている。訪問面接調査で靴製造労働者より靴職人の収入の方が低いことを証明しています。

江口先生の調査はとても大変で、ずいぶん調査にご一緒させて頂きましたけれど、若い頃、調査票をもって帰ると怒られました。「唐鎌君、あなたの調査票は質問項目の回答欄しか埋まってない。研究室でつくった質問項目なんてタカが知れています。現実には調査票を超えて豊富な内容を持っています。調査票の周囲の空白

を埋めてこない調査なんてありえない。事実が描かれていない。項目だけ聞きとって帰って来たのでは駄目。もう一回いってらっしゃい」と。「話をしながら相手から聞き出す技術を持ちなさい」ということでしょう。結局、私は30歳まで出来ませんでした。調査票の設問文の棒読みになってしまう。それで精一杯でした。「相手の心を解いてリラックスさせて、自由な雰囲気の中で調査してきなさい」と言われました。自分でペースを握って調査できるようになったのは30歳を超えた頃からです。ですから、今の学部生が調査できないのはあたりまえだと思っています。若い頃はひたすら調査票に文字を正確に速く書き込むことだけやっていました。先輩たちのそばで迷惑をかけないように。私が22歳で企業に就職していたら、営業なんて無理だったでしょうね。習得が遅いのです。お坊ちゃん育ちなので。

農村社会学の島崎稔先生と京都府美山町に調査に行った時、西山卯三先生という住宅問題をやっていた有名な先生のグループとたまたま一緒に調査をやることになりました。京都大学の大学院生は優秀で、調査に慣れていました。向こうの方が達者で調査技術に大きな差があると思い知らされました。島崎先生から「君たちはおとなし過ぎるねえ」と言われました。それも懐かしい思い出です。でもいつかはできるようになります。続けていけば。

2. 江口先生から学んだこと

私が中央大学大学院に行った時、江口先生の社会調査はほぼ終わっていて、その後は「農村調査」「地域労働市場調査」に多くかかわって、主に中大の経済研究所で調査チームの主査をされていました。また失業対策事業の終息を労働省が狙っていたので、これに対抗するために先生は5年に一度、「失対自立者調査」に熱心に取り組んでいました。

私は川崎大気汚染健康被害者調査が終わった後、長野大学の安井幸二先生の紹介で、先輩の大須真治先生や江口先生と長野県小県郡青木村の調査に行くようになりました。4年間くらい通いつめました。青木村役場の人は、年配の先生に大学院生がついてきていると思っていたのでしょう。ある時、福祉事務所のケースワーカーで30代半ばの藤田さんという若い女性が生活保護世帯の案内にきてくださいました。その時、先生の三巻本を大事そうに抱えて持ってきました。表紙の帯に「日本学士院賞・野呂栄太郎賞受賞」と書いてある本を。藤田さんはそれを町役場の人に見せていました。そうしたら、村役場の人たちは「エッ、こんなに偉い先生だったの。失礼しました」とびっくり仰天していました。先生は恥ずかしそうにされていましたが、私はその時に思ったのです。「これは先生の人生の中で一番うれしかったことだろうな」と。先生はいつも「学問を届ける先は国民だから」と言っていました。福祉のケースワーカーとして貧困者に対面していて、受給者との間でいつも葛藤を抱えているケースワーカーである藤田さんが先生の本を購入して読んでくれた。「そういう人たちにわかってもらえるような、心に届く研究をきなさい。アカデミズムに向けて研究するものではありません。国民に届くように」と言っていました。30代の若いケースワーカーが先生の一冊6,500円もする本（今は古書で一冊3万円ですが）を大事そうに抱えてきた。「私もこういう本を書きたいな」と強く思いました。市井の人々が読んでくれる本を。看護師として、ケースワーカーとして、公務員として、一番矛盾を感じていながらも、どうしていいかわからない。そういう人たちに届く研究をしたいと。その思いだけでやってきました。今も原稿を書くとき、「先生、これでいいでしょうか？」と問いながら書いている自分がいます。

3. 低所得不安定階層研究の今日的意義

近年の状況に関して思っていることを述べたいと思います。「失われた20年」の中で不安定化、貧困化が高度成長の時とは全く違って現れています。江口先生が研究していた80年代とは違い、この30年間、日本では貧困化が進行してきました。日雇い派遣の長期的不安定性、偽装請負の多発、性産業の低い垣根、キャバクラで働いている女子大生もいる時代です。そういうところにまで貧困化が広まってきている。こうした貧困化の現実を見て、どうしたらいいかと思悩みます。江口先生は1990年頃、「このまま日本の社会保障が改悪されていくと、日本全体に山谷の状況が広がってしまいますよ」と言っていました。本当にそうになりましたね。空き家問題、孤独死問題、日本全体に山谷の状況が浸透しています。

でも食い止められなかった。先生でも食い止められなかったことが一番の忸怩たる思いです。研究の力は弱いと思います。でも諦めないでください。学問が学会内で収束しているように思わないでください。学問はまだ尊敬されています。私が調査にいて「立命館大学の唐鎌です」というと、どんな市役所にしても、どの企業にいても受け入れてくれます。「わざわざ来てくださいます」と、お茶まで出してくれます。学者はまだ市民から尊敬されているということですね。研究者が無私の気持ちでやっていることが一般的に認められているから、まだ研究者ができる余地があるのだと思います。要は、どこに向かって研究するかが大事だと思います。いつも先生は私が論文を書いている時に、「唐鎌君、誰に対して書いているのかを考えながら書きなさい」と言われました。誰に読んでもらいたいかを考えなさいと。それが先生の指導でした。

最近、長期間のゆっくりとした落層から一挙の落層へ、階層移動の短期化が進んでいます。「不安定性」「不確実性」が強まっています。自己破産の急増も、かつての若い女性のカード破産から男性サラリーマンの住宅ローン破産に変化しています。ホームレス、路上生活者の若年化が進んでいます。専修大学の時、代々木公園内に300人くらいのホームレス村がありましたが、そこの調査をゼミでやりました。関西には拠点がないので、つながりがなくて調査できないのですが……。その調査の時、何と25歳のホームレスがいました。公園の芝生の上でフレスビーをやっていました。家庭崩壊によるホームレスのホワイトカラー化も進んでいます。リーマンショックの後、所用で東京の新橋にいきますと、愛宕山の方に向かって小学校があります。雨の日にその前を傘をさして歩いていたら、傘もささずに小学校の校庭で襟を立てて背広姿の男の人たちが、校舎の軒下で雨を避けて座っていました。サラリーマンのホームレスにしか見えませんでした。代々木公園のホームレス調査の時に、中小企業（空調会社）の社長さんがいきなりホームレスになった例に遭遇しました。驚きました。

他方、格差の拡大もあります。アベノミクスで潤う超富裕層の一人勝ちの問題です。アベノミクスが始まる前に株を大量に買っていたら、今、笑いが止まらなくなるくらい儲けていると思います。最近、「世界トップ8人の大富豪が、地球上の総人口の半分、36億人分の資産をもっている」と報道されました。たった8人で、地球上の72億人の下半分の人の総資産をもっている。1対4億5千万の格差です。36億人の人々の平均資産額を1万円とすると、トップの8人は一人あたり4兆5000億円もっている計算になります。信じられませんか。こんな金額。人間では使い切れない金額だと思います。これが今の社会です。このように私たちが長時間残業に追われ、不安定化の中で日々心配し、諸経費が上がり、税金も上がり、消費税も上がる。社会保障もカットされる。節約、節約の耐乏生活ですね。「昨年度12月の一カ月の消費は前年度に比べて11.5%下がりました」とNHKのニュースが伝えていました。消費低迷です。これでは景気がよくなるはずがありません。こ

れが実態です。その半面、呆れてしまうようなスーパーリッチが現れている。全体的にずり落ちていく中で、どんどん格差が拡大している。このことを放置しておいていいのでしょうか。

それから、社会保障制度の貧困除去機能の衰退もあります。年金カット、生活保護カット、医療の窓口負担の引き上げ等々です。「世代間不公平を除去するために公的年金のマクロ経済スライド適用をこれから一層促進します」と安倍首相が言っています。ひどい話ですね。カット率は全受給者一律ですよ。月額3万円しかもらってない高齢者にも同じ比率でカットするのですから。どこかで線を決めて、「これ以上の受給額の人に適用します」というのならわかりますが、生きられないレベルの人にも同じ比率で年金を減らしている。これでは血も涙もない、国民のことは考えていないと言わなければなりません。

「社会的排除」と「剝奪的貧困」の問題もあります。フランスのセルジュ・ポーガムが言っている問題が広がってきている。これが今日の状況です。なぜ日本では学問の側から反転が生じないのか、歯がゆくて仕方ありません。しかし昨年あたりから変化が見えてきました。デヴィット・スタックラーとサンジェイ・パスが書いた『経済政策で人は死ぬか——公共政策から見た不況対策』という翻訳本が出ました。この二人は公衆衛生の研究者ですが、財政緊縮をすると自殺、精神疾患、伝染病が増えるということを、すべて実証研究（公衆衛生統計の分析）でやっています。新自由主義批判は神戸大学の二宮厚美先生のようにイデオロギー批判が多い。しかし、今回初めて「新自由主義経済政策はだめだ」と、実証研究で明らかにしたことがこの本のメリットです。A・B・アトキンソンの『21世紀の不平等』が出て、大学院の授業で読みましたが、良い本だと思います。最近、フランスのエマニュエル・トッドが『問題は英国ではない、EUなのだ 21世紀の新・国家論』『シャルリとは誰か？ 人種差別と没落する西欧』『ドイツ帝国』が世界を破滅させる 日本人への警告』という文春新書3部作が出て、読んでみて、すごいなと嵌まっています。たった一人の研究仲間、僕と同じ立場の研究仲間は一人しかなくて、県立広島大学の都留民子先生ですが、都留先生はフランス社会保障研究なので「トッドはフランスではどう評価されているの？」と聞いたら、「少数派だからね」との返事でした。「私たちだって日本では少数派じゃないの」と言ってやりました。都留さんは自覚していないのかな？トッドの初版本は日本で出版されて、それが英語訳やドイツ語訳になって広まっています。都留さんによれば、日本語に翻訳している人は「生活の党の小沢さんの系統だよ。100%トッドを信じていいの？」とのこと。でも誰が訳しているかは問題ではなく、中身だと思います。とてもいい本だと思っています。

その中でトッドは「中産階級にハイジャックされたイギリス労働党」と言っています。「イギリス労働党は労働者階級の党ではなくなった」と。中産階級にハイジャックされてしまったと。これは世界的にそうなっているとのことで、フランス社会党も同じであると、オランダを批判しています。トッドの批判はすごいです。「労働者に寄り添わなくなった知的エリート」とも言っています。今、知的エリートは上の方しか見ていない。これは問題だと言うのです。今回、イギリスがEU離脱を決めましたが、イギリスはもともと最上位の知的エリートが底辺労働者をフォローすることが多いそうで、ロンドン市長のボリス・ジョンソンはイートン校出身で紛れもないエリートだそうです。歴史的にもウィンストン・チャーチルがそうだったと指摘しています。チャーチルは客室が100あるというプレナム宮殿で生まれましたからね。右側のトップエリートが労働者に寄り添う国がイギリスだと。社会調査で有名なチャールズ・ブースも同じです。海運業で莫大な利潤を得た社長さんです。その人が私財を投げうって、ロンドンで当時人口100万人のロンドンの全世帯調査を行った。今の日本で言うならば、数億円の調査費用を私財で賄ったのでしょう。ヨーク市で貧困調査をやったB・S・ラウンリーも、チョコレート菓子の「キットカット」をつくっていたRowntree and Mackintosh社の三代目社長です。1991年にスイス資本のネスレに買収されましたが、今も「キットカット」が商標になって

います。東京駅八重洲口の地下にキットカットの店がありまして、高級キットカットを売っています。1本ずつきちんと包装されて、多種類のキットカットが壁全面に並んでいます。そのウィンドーの一番手前に、キットカットが最初にできた頃の包装紙（パッケージ）が並んでいます。全部ラウンダリー社です。「私はイギリスの貧困研究をやっていて、このパッケージを一つだけ分けてもらいたいのですが……」と聞きましたら、「済みません。ここにあるものは売れません」といわれました。

日本ではどうか。江口先生以降、底辺労働者に寄り添う学問は日本に生まれるのでしょうか。その辺が何とも言えない感じです。ただ世界的に見ると、今の状況がちょっと変わりつつある雰囲気が出てきたということです。11月10日号の『週刊文春』に、トッドが『問題はイギリスではない、EUなのだ』という本の推薦文を自分で書いています。その中にイギリス保守党メイ首相の国会演説が掲載されています。「今まで一番不利益を被ってきたイギリス労働者階級のために、保守党はこれから最善の政策を尽くしたい」と。こういう発言の背景には、グローバリゼーションと新自由主義の30年間で、世界中の人たちが疲れ果ててしまった状況があると思います。これからきっと社会科学は変わっていくと思います。賃金の再分配を受けて、私も給与をもらって生活しています。それは働く人々の所得から出ているお金です。

「学問は、アカデミズムの中で閉じてしまっただめだ」と江口先生は言っていました。「イギリスの学会に参加すると、家庭の主婦が赤ちゃんを背負って学会に来ている。学会が市民に開かれている。日本もあのようにならないとだめですね。日本の学会は権威主義で内向きだから」といっていました。いつも学生にしているのですが、「優れた文化は庶民が評価することで発展する。専門家がお互いに評価し合っているのでは、衰退してしまう。いい落語、いい歌舞伎、いい能狂言は、一般大衆がお金を払って見に行かなければ、成り立ちません。すべての文化・芸術はどんな人でも評価できます。教養がなくても、これはすばらしい歌舞伎だ、すばらしい落語だ、すばらしい絵画だ」と。しかし学問だけは、庶民にはわからないものにされてしまっています。それは学問の世界が社会に対して閉じているからではないでしょうか。一般の人にも理解されるように努力するべきです。一般の人から評価を受けることが大事です。日々働いて生活の中で日常と闘っている人から評価を受ける研究をやるべきです。それがいま研究に求められている一番大事な点だと思います。そうなると、学問は墮落しません。すべての芸術の健全性は、最終的には庶民の評価によって支えられています。学問だけが例外であってはなりません。現状のままでは学問はどうなってしまうのか、心配でなりません。就職とかプロモートとか、学問の世界が人間関係でつくられていくことに恐ろしさを感じます。学生のみなさんはそういう学問の一端を担っているのですから、先生方に対して自分たちの生の声で質問してください。「ここはどうなのでしょうか？」と。みなさんはそういう役割を担っています。これが今日、言いたいことです。

私は定年退職で自分の仕事が終わったようには思えないのです。定年も一通過点だと思っています。まだまだ仕事ができるような気がします。教育はできないですが、研究はまだできそうな気がします。江口先生と同じように、研究を死ぬまでがんばろうと思います。それをきちんとやって、自分が納得でき、天国の先生に「ちゃんとやりましたよ」と報告できるようにしたいと思っています。あとしばらく博士課程院生が修了するまで特任でいさせていただき、なるべく早く特任を辞めて郷里へ帰り、一研究者として日々研究できるようにしたいと思っています。そして時々、庭でバラを咲かせながら。今日はご清聴を、ありがとうございました。

唐鎌 直義教授 略歴と業績

略 歴

- 1952年 1月 群馬県生まれ
- 1974年 3月 静岡大学人文学部法律経済学科経済学専攻
- 1976年 3月 中央大学大学院経済学研究科経済学専攻修士課程修了
- 1982年 3月 中央大学大学院経済学研究科経済学専攻博士課程後期課程単位修得退学
 長野大学産業社会学部社会福祉学科助教授
 大正大学人間学部人間福祉学科教授
 専修大学経済学部経済学科教授を経て
- 2012年 4月 立命館大学産業社会学部教授
- 2017年 3月 学校法人立命館定年退職
- 2017年 4月 立命館大学特別任用教授

(主な学内役職歴)

- 2013年 4月～2014年 3月 立命館大学衣笠キャンパス労働者代表
- 2014年 4月～2016年 3月 産業社会学部人間福祉専攻長

- 専門分野 応用経済学, 経済政策, 社会学, 社会福祉学
- 担当科目 老人福祉論, 老年社会学
- 研究課題 貧困率と捕捉率の測定, 今日における貧困概念の多様化に関する研究,
 日本における高齢者の生活実態と社会保障の課題
- 学位 経済学修士 (中央大学, 1976年 3月)
- 所属学会 社会政策学会, 経済統計学会

主な研究業績

著 書

1. (共著)『社会福祉と貧困』(江口英一編, 法律文化社, 1981年) 81-96頁
2. (共著)『現代の生活と「社会化」』(江口英一・相澤興一編, 労働旬報社, 1986年) 173-204頁
3. (共著)『重化学工業都市の構造分析』(島崎稔・安原茂編, 東京大学出版会, 1987年) 659-691頁
4. (共著)『生活分析から福祉へ—社会福祉の生活理論』(江口英一編著, 光生館, 1987年) 73-93頁
5. (共著)『日本社会調査の水脈—そのパイオニアたちを求めて—』(江口英一編, 法律文化社, 1990年) 441-479頁

6. (共著)『これからの在宅福祉サービス』（河合克義編，あけび書房，1990年）112-128頁
7. (共著)『社会政策と社会行政』（大山博・武川正吾編，法律文化社，1991年）113-140頁
8. (共著)『地方から都市を考える』（長野大学編，郷土出版社，1993年）29-52頁
9. (共著)『現代の労働者階級—過重労働体制下の労働と生活』（江口英一監修，労働総研・全労連編，1993年）149-195頁
10. (共著)『「地域労働市場」の変容と農家生活保障』（中大経済研究所編，研究叢書26，中央大学出版部，1994年）169-208頁
11. (共著)『貧困・不平等と社会福祉』（岩田正美・杉村宏編，『これからの社会福祉』第2巻，有斐閣，1997年）181-201頁
12. (共著)『社会保障と生活最低限—国際動向を踏まえて』（中大経済研究所編，研究叢書30，中央大学出版部，1997年）1157-189頁
13. (共著)『生活分析から福祉へ（改訂新版）』（江口英一編著，光生館，1998年）98-118・129-150頁
14. (単著)『日本の高齢者は本当にゆたかか—転換期の社会保障を考えるために—』（萌文社，2002年）1-181頁
15. (共著)『公的扶助論』（川上昌子編，光生館，2002年）11-30・113-124頁
16. (共著)『社会保障構造改革』（相澤與一編，大月書店，2002年）第4章
17. (共著)『社会福祉運動とはなにか』（浅井春夫・真田是・小賀久編，『講座21世紀の社会福祉』第2巻，かもがわ出版，2003年）8-38頁
18. (共著)『2005年日本の福祉—論点と課題—』（相野谷安孝・垣内国光・河合克義・植田章・唐鎌直義編，大月書店，2005年）20-31頁
19. (共著)『「福死国家」に立ち向かう』（社会保障総合研究センター編，新日本出版社，2005年）9-48頁
20. (共著)『社会保障でしあわせになるために—「社会保障基本法」への挑戦』（京都府保険医協会編，かもがわ出版，2007年）22-51頁
21. (共著)『格差・貧困と生活保護』（杉村宏編著，明石書店，2007年）215-225頁
22. (編著)『どうする！あなたの社会保障①医療』（唐鎌直義編，工藤浩司・末永睦子・林泰則著，旬報社，2007年）
23. (編著)『どうする！あなたの社会保障②介護』（唐鎌直義編，工藤浩司・末永睦子・林泰則著，旬報社，2008年）
24. (編著)『どうする！あなたの社会保障③年金』（唐鎌直義編，小澤薫・久昌以明・宮本悟著，旬報社，2008年）
25. (編著)『どうする！あなたの社会保障④生活保護』（唐鎌直義編，都留民子・小池隆生・木本明・今井伸著，旬報社，2008年）
26. (共著)『格差社会の統計分析』（岩井浩・福島利夫・菊地進・藤江昌嗣他，『現代社会と統計』第2巻，北海道大学出版局，2009年）129-159頁
27. (共著)『「大量失業社会」の労働と家族生活—筑豊・大牟田150人のオーラルヒストリー—』（都留民子編著，高林秀明・堀木晶子・増淵千保美著，大月書店，2012年）241-269頁
28. (単著)『脱貧困の社会保障』（旬報社，2012年）1-324頁

29. (共著)『社会保障再生への改革提言—すべての人の生きる権利を守りぬく—』(日野秀逸監修・日本労働総合研究所編, 新日本出版社, 2013年) 21-54頁
30. (共著)『日本の社会保障, やはりこの道でしょ!』(都留民子・唐鎌直義著, 日本機関紙出版センター, 2015年) 10-87・144-200頁
31. (共著)『ここまで進んだ! 格差と貧困』(稲葉剛・青砥恭・唐鎌直義他著, 新日本出版社, 2016年) 3-8・57-78頁

論 文

1. (単著)「『社会的費用論』の現段階的意義」(中央大学大学院『論究』10巻, 1978年) 1-12頁
2. (単著)「社会保障・社会福祉の公的責任に関する経済論的考察」(中央大学大学院『論究』14巻, 1982年) 32-36頁
3. (単著)「現代都市の社会病理・都市公害として—大気汚染健康被害の経済的考察」(中央大学社会科学研究所『報告』2号, 1984年) 45-57頁
4. (単著)「農村における高齢者堆積についての実態分析」(中央大学経済研究所『年報』16号, 1987年) 138-151・176-198頁
5. (単著)「労働力の価値と『貧困』—発達した資本主義社会における『貧困』理解の方法について(上)—」(長野大学『紀要』12巻2号, 1990年) 45-57頁
6. (単著)「労働力の価値と『貧困』—発達した資本主義社会における『貧困』理解の方法について(下)—」(長野大学『紀要』12巻4号, 1991年) 1-17頁
7. (共著)「兼業農家地域における生活保障水準の追究」(大須眞治・唐鎌直義著, 中央大学経済研究所『年報』21号, 1991年) 205-265頁
8. (単著)「『生活の最低標準』にもとづく社会システムを」(『賃金と社会保障』1064号, 労働旬報社, 1991年) 49-55頁
9. (単著)「高齢者像の明確化と福祉の課題」(『賃金と社会保障』1066号, 労働旬報社, 1991年) 11-18頁
10. (単著)「『利潤ブロック構造』下の社会保障と勤労者生活」(『経済』336号, 新日本出版社, 1992年) 278-293頁
11. (単著)「高齢者の生活問題と年金制度」(法政大学『大原社会問題研究所雑誌』443号, 1995年) 17-33頁
12. (単著)「社会保障問題の今日的性格」(『労働総研クォーターリー』27号, 労働総研, 1997年) 2-9頁
13. (単著)「イギリス公的扶助制度の現況」(『大正大学研究論叢』5号, 1999年) 123-145頁
14. (単著)「高齢者の経済生活と高齢期雇用の現実」(『東京研究』4号, 東京自治問題研究所, 東信堂, 2000年) 146-168頁
15. (単著)「中年家族持ちワーキング・プアの生活と社会保障改革」(『ポリテイク』10巻, 旬報社, 2005年) 66-80頁
16. (単著)「家族持ち勤労者世帯に広がる貧困と格差」(『総合社会福祉研究』28号, 総合社会福祉研究所, 2006年) 2-14頁
17. (単著)「高齢無業者の生活とナショナル・ミニマム」(『労働総研クォーターリー』62/63号, 労働総研,

2006年）63-71頁

18. (単著)「『貧困』への道は『自立』で舗装されている」(『月刊全労連』121号, 2007年) 1-12頁
19. (単著)「高格差社会と不労所得階級の増大」(『消費者法ニュース』1月号, 2008年)
20. (単著)「日本の社会保障の再構築は貧困の正しい理解から」(『総合社会福祉研究』36号, 総合社会福祉研究所, 2010年) 2-9頁
21. (単著)「貧困の除去を忘れた日本の社会保障」(『月刊保団連』1041号, 全国保険医団体連合会, 2010年) 38-45頁
22. (単著)「なぜ資本主義は貧困を広げるのか」(『経済』182号, 新日本出版社, 2010年) 30-39頁
23. (単著)「社会保障の今日的課題と改革構想」(『日本の科学者』, 日本科学者会議, 2011年) 52-58頁
24. (単著)「脆弱な生活再建の土台—社会保障による生活再建の思想—」(『経済』194号, 新日本出版社, 2011年) 39-51頁
25. (単著)「労働者階級の貧困と社会保障」(『総合社会福祉研究』39号, 総合社会福祉研究所, 2011年) 8-21頁
26. (単著)「社会保障の拡充は『富の再分配』で」(『保育情報』423号, 保育研究所, 2012年) 4-10頁
27. (単著)「『脱貧困』の視点からみた日本の社会保障制度の課題」(『にじ』2013年夏号/642号, JC 総研, 2013年) 10-19頁
28. (単著)「貧困者切り捨ての社会保障制度改悪」(『月間保団連』1174号, 全国保険医団体連合会, 2014年) 11-18頁
29. (単著)「日本における貧困の広がり」と所得再分配機能の衰退」(『月間保団連』1216号, 全国保険医団体連合会, 2016年) 20-26頁

その他（調査報告等）

1. (共著)『イキイキした世帯更生資金貸付制度の確立』(東京都社会福祉協議会, 1987年)
2. (共著)『社会保障・社会福祉援助事典』(労働旬報社, 1989年)
3. (共著)「人生80年時代の雇用政策を問う（調査報告書）」(『賃金と社会保障』1027号, 労働旬報社, 1990年)
4. (共著)『福祉指標の開発に関する調査研究』(東京都福祉局, 1990年)
5. (共著)「人間らしい労働と生活の実現をめざして（調査報告書）」(全国労働組合総連合, 1992年) 132-152頁
6. (共著)『現代福祉学レキシコン』(京極高宣監修, 雄山閣出版, 1993年)
7. (共著)「現代の失業の新しい性格（調査報告書）」(『賃金と社会保障』1125/1126号, 労働旬報社, 1994年)
8. (単著)「日本の高齢者は豊かか」(『賃金と社会保障』1193/1194号, 労働旬報社, 1997年)
9. (単著)「90年代勤労者家計に見る矛盾の深化と社会保障（上）」(『民医連医療』297号, 全日本民医連, 1997年) 64-68頁
10. (単著)「90年代勤労者家計に見る矛盾の深化と社会保障（下）」(『民医連医療』298号, 全日本民医連, 1997年) 47-51頁
11. (共著)『社会福祉辞典』（一番ヶ瀬康子・早川和男監修, 大月書店, 2002年）

12. (単著)「特集『日本の現実』・社会保障」(『世界』8月号, 岩波書店, 2004年) 125-126頁
13. (共著)『社会保障・社会福祉大事典』(旬報社, 2004年)
14. (単著)「生活保護は何を守るべきか」(『法律時報』79巻13号, 日本評論社, 2007年) 355-358頁
15. (単著)「高齢期生活と社会保障」(『月刊社会保険労務士』1月号, 全国社会保険労務士会連合会, 2008年) 15-18頁
16. (共著)『特別支援教育大事典』(旬報社, 2010年)
17. (単著)「セーフティネットとしての生活保護と女性」(『女性白書2010』, 日本婦人団体連合会, 2010年) 106-109頁
18. (単独)「生存権・社会保障の危機と日本国憲法(インタビュー記録)」(『学習の友別冊夏号・日本国憲法再確認』, 労働者教育協会, 2014年) 30-43頁
19. (単著)「高齢者の貧困とその原因」(『地域ケアリング』18巻4号, ニュー・サイエンス社, 2016年) 25-29頁

IV. 社会における活動

1997年7月～2013年6月	労働総研常任理事
1998年4月～2009年3月	東京都葛飾区介護保険事業審議会委員
2006年4月～2012年3月	群馬県館林市男女共同参画審議会会長
2002年9月～現在に至る	総合社会福祉研究所理事
2010年4月～現在に至る	東京都葛飾区介護保険事業審議会副会長
2012年4月～2017年3月	群馬県館林市男女共同参画審議会副会長
2017年4月～現在に至る	群馬県館林市男女共同参画審議会会長

以上